

## 大口玲子歌集『自由』 黒岩剛仁

大口玲子の第七歌集『自由』は、思い切った言い方をすれば、〈母と子〉の歌集だと言えるのではないか。それほどに〈わが子〉を詠んだ歌の数が多く、またどれもが印象に残る歌だった。中でも、〈わが子〉のウエイトが高かった四つの章、「対局」「自由」「盗み見」「オーロラを動かす」から二首ずつ引いてみよう。

・「今日は帰ります」と教頭に言ひて帰る息子あつばれと内心思ふ  
「対局」

・子の短歌うたに子のさびしさは歌はれて母として読めばさびしくなりぬ  
「自由」

・学校には自由がないと子が言へり卵かけご飯かきまぜながら  
「自由」

・リコーダーも持つて帰ると子は決めて「さびしい時に吹くから」と言ふ

・学校を休んだ息子と散歩して茗荷のてんぷら食べたき夕べ  
「盗み見」

・図書館に盗み見てをり『はだしのゲン』読んで苦しむ子の横顔を  
「盗み見」

・アムンゼンとスコットどちらが好きと問はれ息子とわれの答へは違ふ  
「オーロラを動かす」

・オーロラを動かすマウスに触れて子はひとり極地に立つごとく冷

えて

これらには、学校を休むようになったナイーブな息子と、もちろん心配しつつであろうが、冷静にしっかりと受け止めている母の姿が歌われている。しかも、教頭先生に律儀に挨拶をして帰ってきた息子を内心あつばれと思ったり、ともに茗荷のてんぷらを食べたいと言うのが、いかにも大口玲子なのである。

他の章からも引く。

・原告席より眺むれば傍聴席二列目の息子ふかく眠れる  
「椿の夜に」

・人間に死といふ節目あることを知りて十歳の息子涙す  
「葎ほど小さき 悼 小紋潤さん」

・仁王像の憤怒の前につつしみて子は箒取り落ち葉を掃けり  
「鯉はそれぞれの」

・ピストルの弾込め係となれる子は心をこめて弾込めてをり  
「船長の家」

・「パプリカ」を歌ひつつ着替へある息子いまだコルリのごときさへづり  
「さへづり」

一、二首目はそれぞれ、九州電力を被告とする裁判に、「心の花」の先輩である小紋潤の葬儀ミサに伴った折の、そして、四首目は転校先での運動会でスターターの補助役を務めている息子の姿である。コルリのように歌う声を含め、五首いずれもいい歌だ。

〈母と子〉の歌ばかり引いてしまったが、もう一首だけ引かせてもらおうなら、〈死刑〉を詠んだこの歌を。

・殺すには理由のありてこの国の制度がさらに殺す ひとりを  
「黒き桜」